



倪濤一系集

三

利
1258



俳詠一葉集附合之部二



貞享元甲子冬

狂句本枯の身六竹言物似しる可
たそやとげしる望れ山原花
るのま水子海原他くさく
うしらすたあをふくふ赤了
新解のふそりすそふのふいふふ
白のふて(平沙平米を)

古學庵俳号
幻窓 湖中
坎窩 久臧 校

為
野水
若号
重玉
杜劍
正平

糸虎ハ邊子ハ何子ハ何子ハ何子
 髪とやす可き志のあめ。何と
 仍れつ〜と乳を志す〜十と
 消ぬ卒却懐子す〜と〜と
 かけ流〜何曉さ〜火を焚〜
 何〜ハ〜何〜何〜何〜何
 田中〜小主人ハ何〜何
 昔子ハ舟ハ人ハ何〜何
 何〜何〜何〜何〜何
 味さ〜〜何〜何〜何
 二の危子何情の花の何〜何
 蝶ハ何〜何〜何〜何

今了〜〜の矢を〜何〜何
 何人ハ何念の何〜何〜何
 志ハ〜何〜何〜何〜何
 望ぬ何〜何〜何〜何
 何〜何〜何〜何〜何
 志〜〜と〜何〜何〜何
 鳥城ハ夷ハ何〜何〜何
 何〜何〜何〜何〜何
 秋水一斗〜何〜何〜何
 日東の李白〜何〜何〜何
 何子ハ何〜何〜何〜何

水 五 玉 水 号 玉 翁 号 五 翁 水

五 号 翁 水 五 玉 水 号 玉 翁 号 五 翁 水

初あの子や嫁仕の先く
先心くらむ喜かきゆき
松葉餅すゆの室作のあま
くさす起上秋溜も
藤涼く楳を榊の葎き
三原可ん不破の再人
そすく美濃さあき基を
紗と先くはさす七十
なかめさう法事さあき
ひさ川の傘のいこさ
道徳子徳の子あまき
まきまつり存ねを海

水 玉 号 五 玉 翁 五 水 翁 号 水 小

なすたしる猫の髪あま
あきぬ碓氷海をさ川
秋掬はあきさきく静さハ
あきの静つらあきさ川
彼より祝をひきき山可け
ひさの興作の扇の内付可
三々の也翁静尾長け
くさみさくむ越の留活

号 玉 翁 五 水 翁 号

杖をひきさ川さ
清みさく月さく
水玉みゆくあきさ

杜園
重五

昔年の業を初持人の方と申ひく
 水の伊門と申し阿けの喜
 万葉の傳若き一む神色のたんや
 ら〜けり物と申娘〜つや
 燈籠ふ〜り手情〜りふ
 分萩の角力ら〜り〜を〜り〜
 萬葉の喜〜一後賀木の切
 的有取又と申お娘〜り〜
 ありも買〜り〜り〜り〜り〜
 忍ふ百の業〜り〜能〜り〜
 扇婦の取〜り〜米〜り〜り〜

野水 扇 高年 正年 五 不 扇 水 扇 水 五

心解ま〜り〜は浪のあり嵐れり
 佛一 咄〜り〜魚〜り〜り〜
 縣ふ〜り〜も見二所と傳りれり
 五取〜り〜り〜の〜り〜けり及
 二
 古屋のり〜り〜あり〜り〜
 百條や文綴の橋の長や水
 花〜り〜の松を〜り〜り〜お〜り〜
 花〜り〜の柴薪〜り〜けり〜り〜
 三十〜り〜り〜り〜り〜り〜
 白〜り〜の粒吳不の〜り〜
 淋〜り〜り〜解〜り〜り〜袖〜り〜り〜

号 五 水 号 五 水 扇 五 扇 号

乃人を行も枯干欲ほさん
 けしはくしりなきともし解
 三の力も車もくく降のき
 秋出出子腎之き者
 意下をもゆき下海道を放る
 ありよふ念佛慧を満の
 朝くまも新修けし起修く
 初りふくもくも秋の帯引
 こわれ花玉の地の花を入
 貴重たらしきを余もおもく
 五 水 号 水 号 水 号 水 号 水 号

難波津より河へ大くくあえ

才けりか
 若く可の村のあつる道は
 人の影の色は鏡 磨き
 花を棘の骨のちかきり
 鳥えつるを北内つりし
 風は秋のな瓶子に
 萩 磯 笠を市に振す
 かつ川や柳麻ふ代茶飲をみ
 いくくくくくくくくく
 思ふくく布指高きり
 くのえ二十もくゆり三平
 控くもくくくくくくく
 五 水 号 水 号 水 号 水 号 水 号

火を忍ぬ火焼ふふ人を忍ぶ
門をのらぬけし我を可くして世の
血刀をくくしうぬのらうぬ
老方下る本御の程七つ
そま川 柳をたたくま
花よりは梅の戀こそ持てる
信ものいんす 歎きをもの
白蓋留ぬぬまの羽を洗ひ
宜青のこく 叙と傳る
八十季を三つ 尺の童母持る
あゝいんすむく七つ 女の妻
石をく 桂のつらいつらむ物

あまの 柳よりト木くつれや
殊の家を 笑ひし。女尺の 柳の
羽瓶より 葉を 洗ふりの 音
依り来り 柳子かきら 正内は
つらみなる 向る 舞臺の 室
子の白の 息を 強治の 息起す
あゝかゝは けき 土南 京の 地
つらやう せは 後にも ぬ人の 縁
泥より さらの 信き 芥の 根
柳すゝる 曉 せうの 一こま
智名の いんす 鐘ふき 風
水の分ふく (鐘 柳 せう)

所へはむらさきをせむ村向

玉

田舎御堂

若年

和泉月や静のつくし無ひはそ
夕のゆきあふあふれあふり
櫻槍山家の傳は木村家傳
ひやす。牛の境にゆれつ
音もあふ具足は力ぬくすしと
酌とる音葉きりにいて
秋の頃旅の湯を来いといふに
ややくとれく不二尺ゆき寺
病とる桂の花のあふる方

玉 号 翁 野水 羽笠 社園 重三 翁

葉よりあふそをせむる風のよ
桂柳ひく志原の女玉三十
庭より木音化つしひの落衣
夕涼水山橋より梅尺を
麻うりしよふ葉の葉所
江を近く獨糸流くせを捨て
余月やよふの穢あふ
流るる満ちる花をそとるひ
葉葉ゆらさす木瓜の山
骨をも足さすゆきあふさす
乞食の葉をもとる志のめ
泥の上より尾を曳解を捨ひえく

玉 号 翁 水 笠 玉 五 翁 号 水 玉

佛堂より送むるのあはれなり
津より思ふの小角豆のあはれなり
萱花をまきしに炭火つくの白
芥子の尾の小坊まきしに炭火つく
折る草の宿まきしに炭火つく
新さき飯基のまきしに炭火つく
糸おくね風やまきしに炭火つく
物林より松根よりまきしに炭火つく
豆鼓つらまきしに炭火つく
元日のまきしに炭火つく
伏見本橋の積りぬまきしに炭火つく
いり海より男猫のまきしに炭火つく

水 笠 号 篇 五 風 笠 水 篇 号 水 五

喜のまきしに炭火つく
あ干をまきしに炭火つく
山よりまきしに炭火つく

水 笠

同

羽

いりよまきしに炭火つく
杉火よりまきしに炭火つく
木城よりまきしに炭火つく
松 笠よりまきしに炭火つく
浪よりまきしに炭火つく
いりよにまきしに炭火つく

水 笠 号 篇 野 水

同年臘月十九日

海客之船の幸へて海客の白く

串に鯨をとりし 鯛

二百年来以山より寄取く

瀬の静まき秋を暮らす

入月を翳けしきよのまをぬ

かきまよふ玉をながれぬ

海客の心も母のまをぬ

一掃 嘆き 昔の

棋の工丈二白とらぬ

月を翳けしきよのまをぬ

雲を翳けしきよのまをぬ

篇

桐葉

東孫

二山

紫

篇

山

篇

紫

篇

華表をけしきよのまをぬ

笠をかきしきよのまをぬ

秋の鳥の人をけしきよのまをぬ

をけしきよのまをぬ

芳れきよのまをぬ

おもしろきよのまをぬ

美人のかしきよのまをぬ

城東の聲をけしきよのまをぬ

生海客の心も母のまをぬ

木をけしきよのまをぬ

藪をけしきよのまをぬ

あつしきよのまをぬ

山

紫

篇

山

紫

山

篇

山

篇

山

篇

紫

系子あまきし 痛のましあひ
不二の根と望見て百千のくあひ
宿のゆく都のひとみあひ
中つるまを思ひのくすねい
衣うらく小姓あひの戸を押
月向くお針のひき八つづ
板いそくきえうの 家
破れぬ具足を西子踏つけ
う集の物とてけけり
紅梅の影紙に花の姿を紋
ちひとてまの永ふらゆ 伽
まあの新者お標あひ本了

ま、子らすす 庵の振 折 庵

あまのしきむあひあふ秋のそだ 雷枝

秋のひあまのしきむあひあふ秋のそだ 翁

河の橋むし 捨つむ本葉の丸 塔山

すききり葉の葉四十

箱

古人のやうに此の木のうしろ

箱

如行

杉の葉をいづれか
行一つに足はみゆ

箱

桐葉

志のあそび松の葉をいづれか

箱

志のあそび松の葉をいづれか

桐葉

志のあそび松の葉をいづれか
志のあそび松の葉をいづれか

箱

閑水

東蘇

桐葉

志のあそび松の葉をいづれか
志のあそび松の葉をいづれか

箱

桐葉

東蘇

燈火風をまのよ紅粉
川流ゆき誓と角に流るけ
令利とく 腕を動かさく
かこきく 所の陽中の花久
雨打千海をさく 楳や
あよみく 女を春相さく
枕 屏風の終へ 候くみ
あふれ 一箇のいろえのきさく
三段の舟 深川の板
危位やい 杜律を味ひく
花うすく 竹こよのきさく
いよ 草 野に吹矢をわひさく

端 紫 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端 扇

水汲小使 袖の中
月めく 少枝ををるく
やハ 夜半の流るく
村中のそき 物さく
いよ 川 鬼の瓜 候く
望尺ゆく 人の舞をさく
男やも 女を 志す 候く
風く 大きな 秋の七つ
海門を 行く 生 鯉の 巻
岩盤 山 岩盤 助 候く
あふく 流る 巻 海 の 松

端 紫 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端 扇

同日

つくと枝のむね油うらら
ひくくさきをついむぬの一家
夕霧山神詠の雛をむくも来り
信もろとすくふる柄杓の月
わもいらきぬきこ館うらけの上
言のたまふに探るもほら
鼻残千劫のまよふにけり
そり大波千三升の降きく
まると徳道の焼く袖と尺よ
おゆりゆく鴨乳四五百の虫
お風のひくきく海を飲かす

桐葉

菊

叩端

黄口

東森

山

菊

端

山

葉

口

佛一ときさむ西谷の徳
鳥羽玉の髪きく女着るも来り
急をもん破る朝の日の月
秋ハ初只者お物うらひり
白子のたまふと香方の海
浪うらうら鯨の骨を花哉
泣わらう初初のかうらもそ
望おろさるるにたしやき男
玉空の塔のほらうらみこれ
鶺鴒の尾を端の圍う掛きて
風千あを置るよの付死
華うらうら杯の度あを引挽め

庭

端

菊

山

葉

端

菊

端

桂

端

山

葉

田舎多し物足る事
おろくくあふのこゝろあり
多しはく君と風可なり
白のみの跡し船おきこ
おほん帰言お妙を占ふ
籠籠のあは寺の月満く
猪子の粟は何とまひく
掬ふまきと松林の秋の虫
そ家あふりく尾の尻
まふりく物焼く何れ
入りの江乃早二
言ち油きけつる花のたぐ

庭 口 柴 山 庭 山 庭 柴 庭

つーいお少く見くら西行

楫

同

牡丹甚多と深くさひや、梅のあは
新月浮し、家の玉碎
要袋らみまふおかけ
はくし船をけいさる
新家根すきまぬ板の雨雲
二百里のひかりるれ
たぐと引流ハ少ありの男同士
浪を濁る地の人うけ
竹埴のすくさく力のみ

桐葉 叩端 庭 柴 庭 柴 庭 柴 庭

草の葉くわゆる牛の魚
手ふくくきまふくの一弁り原
からんのうてきふか高光
くすくきまふくくわの眉
双のくくわ合ぬく一華
くくくくくくくくくく
省志風をうつく舟の志より
花あつさふ尺くの角矢余
茎の尻をさす肩衣
出代の腰をさけくお子辰
午時のうめくくくく風志
地雷火くくく浪の志より

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

終りの樹をさす 枯柳
情正けくくくくくくく
くくくくくくくくくく
お柔葉のうめくくく扇衣
松の乞食の袴る小衣
物衣は後く相りく上靴
恥の言くくくくくく
端紫のうけぬくくく月の手
風冷神のくくく白砂
振あをいくくくくく
長あくくくくくく
燈のくくくくくく糖油

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

湯さやの秋は産ふ本言
花垣子雲うのまき紫引鏡の
これも角廻まは堀牛
菊

同

秋も心まき木多や四月の板竹
まきの杖つく岨のまき
牛の子は乳をのむと紫
かけろふと竹の籬棚
続つても雲の越くつ
ひくくけつと松
霧くやうと涙の天を降る
菊
東蘇
榭
叩端
相乗
工山
店

狂歌の傳りかきを只
鼻歌千流を流る女
ふさけの市上上の絶つ
等つつ歌子のまはる
うをるまはき
水
紫
榭
閑水
菊

同年六月二日東武於小石川無行

清さの瀬くくくくく
青蓮子
松風のたうと紫崎
酒店の秋を厚子の
社々まき
清風
菊
嵐雪
其角
才丸

昔 蝶 依 く 夢 事 志 しく
こゝの 記 々 奈 いか 夢 事 年 歳 之 元
種 を 花 多 ぬ け け け け け け け
元 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
お ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ
戸 隠 の 山 小 家 の 静 々 々
何 苦 梨 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
再 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
雨 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
雪 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
既 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

口 膚 素 堂 風 壺 角 丸 壺 霜 風 壺 角 丸 壺 霜 風 壺 角 丸 壺 霜

晴 乃 乃 乃 乃 白 眼 々 々 々 々 々
咲 綿 苧 干 々 々 々 々 々 々 々 々 々
淨 瑠 璃 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
粧 の 室 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
花 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
水 系 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
三 尺 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
幾 回 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
遊 水 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
白 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

角 丸 壺 霜 風 壺 角 丸 壺 霜 風 壺 角 丸 壺 霜 風 壺 角 丸 壺 霜

又碎一破の更なり噫——
臨のすくみうのしるまき
を——息吹のほを二羽くら
我造りぬ指の罪を指をん
きぬくの名存おまそ
ゆのあれがつく——の人の
古梵のせうに花四をむ
ひら——しぬを臨のすくみ
引板を業く——をのこ
武古のものすまき穢心
七里は二舞の七里秋風
盈之の雷南はあは化——

翁 空 角 丸 高 壺 風 翁 壺 高 丸 角 空 翁

槐の小る。さく解らす
臨陽神の宿るそまの飯屋建
狂女さりとよふ法まよふ
情——るあはまの朽て
将く啼ふ出羽の餅
空月のこもつふゆうさま
枯るあ——のつりそ秋暮
智多れまの起脚をゆるのみ
三里たすえう不二の足
扉をゆふら次もか入る
まを然る小の晦日
臨片とまゆ椽低く狭うき

翁 壺 高 丸 角 空 翁 壺 高 丸 角 空 翁

砥水きよむる五郎入花
伴もまじ戸も穢くかくこ
まらちあしし風うほく敷
伊勢すしれ湯柳の敷はさし
入院尺高の長う破と法
一陽を敷正月をゆる末
ぬ梅よしりひくしや
海屋のあしりおろをぬむ
志の子れみしれ瘡もくし
くお幸とくお川竹をさく
名もあし取もくしりし
后の月高し入射あし史

空角丸高堂風蒲雪角高寺

三
みゆけさきひきまきまの横末
みの出れ狂討つるれし
忠を死せる塚をくむ
初をたれ石山四
小女郎小まんの大根変丁
血もさく起情もさけり
尺よものぬか門ハ石むき
涉河のぬかをさくらの新浦
汗涼うしり横了
さくさくしれ旅字案く空紫
子さくさくしれ小坂の井山
故花もさくさくしれ月高し

風蒲雪角丸高堂風蒲雪角丸

胸くわつらん何のし料
研しつて浮取する舟のまきとま
之船の如く岩をいらくら
きれたにり乳人ら魂ハたけり
麻布の病変ははやくまけ
わらう葉やいふりのまき
又治二季のちり石も
みしれ髪保るるまは保る
珠やかよふまらるる
三日月の氣西にすまらる
秋ハものまけはたの棟
燈心もねつハまらるる神員

角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳

只一眼もそハ一
特のくらきまきり夕百
定家うらけは鏡むき
佐く咲も八まは尺を
梅の輪入の位心わ
ひるさも強干之るくら
能き惜ぬ不勤号き
あまのささひまらるる
あまのささひまらるる
あまのささひまらるる
あまのささひまらるる
あまのささひまらるる
あまのささひまらるる
あまのささひまらるる
あまのささひまらるる

角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳
角丸膏風翳

梅さくら〜きのや ちをぬまわれし
秋葉をみするまにニッるふらり

菊

秋風

香さくら〜幸息さくら 枇杷の産地
笑う〜こころ山をのむ
りのあ 秋洞の音をきく〜

秋風

菊

湖春

檀の木はあやかやうぬ 湯あめの
家すけう 去をほさふこころ

菊

秋風

梅 絶くうふ〜 梅 今何々
まのまはけ 蚕 葉を〜 つく
葉の中〜の葉の葉の葉の葉

湖春

菊

か〜さばのねんあ〜 桃うさぎ
山さくら〜を 後〜 春 田

菊

湖春

さくらよ 春のけ 花のけ
さくらよ 春のけ 花のけ
さくらよ 春のけ 花のけ

菊

湖春

貞享三丙寅

柳陰談

日のまをりてさすのこり 柳の河内みけ
えおのりけとるあまのこり ちり長軍出
去あけけききおの河内みけにけり
つゝお竹の般きくおのりけの流るるに
まゝの葉茂るかな

其角

みきうにさす入吉寺の柳の家

文録

貞徳夫人の服仲四色けりともれ侍れ
くもあけけり古くさすの葉茂るにさす
くもさすの柳の葉茂るにさす

本村のまにけりし枯る家の柳の葉茂る
けりきくも葉茂るにさすの柳の家
柳の本にけりし同くもあつゝえおの柳の
葉茂るに本かりのさすもあつゝはの
さすの柳の葉茂るにさすの柳の葉茂る
柳の葉茂るに柳の葉茂るに柳の葉茂る
柳の葉茂るに柳の葉茂るに柳の葉茂る
柳の葉茂るに柳の葉茂るに柳の葉茂る

松風

ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る
ちり村の柳の葉茂るに柳の葉茂る

見お素衣し何と付くもみく何と
陸ゆきもみくし里しのまきつひる
よし松飾をわらひかしむみくし
うらひきよく雨を催し付る意
井口字法をむね

春白

物まじき三島をみぬみくみぬ
これきしきくもたうくし信者の心は
く思ひたしきくもたうくし信者の心は
あやもすしきくもたうくし信者の心は
念佛より信り信り信り信り
此の心は信り信り信り信り
社之佛者をしむるの心は信り信り

朱信

あまの信り信り信り信り
そと通る里の信り信り信り
信り信り信り信り信り信り
信り信り信り信り信り信り
信り信り信り信り信り信り
信り信り信り信り信り信り
信り信り信り信り信り信り

蚊足

かきかきよきよきよきよきよ
かきかきよきよきよきよきよ
かきかきよきよきよきよきよ
かきかきよきよきよきよきよ
かきかきよきよきよきよきよ
かきかきよきよきよきよきよ
かきかきよきよきよきよきよ

五里

子烟

ましゆーいけやうやくーいしよーい

の姿そり眼を付し足し

くききけふふを富の足ゆめ

あふを標中より付し

ーをまろしきし都し世を

まろしきし親也

あくされし太の本籍の

富の只酒よりしきし

より志の句を借し

あく志わしきあめ

より借しきし

のり作を感懐り

執筆

文籍

後任女 きぬし

後任女は後任の妻と

まれしきしは後任の物

あひをきぬし

子方の物ゆえ

あひをきぬし

いけみ乳とのむ

いけみ乳とのむ

いけみ乳とのむ

いけみ乳とのむ

いけみ乳とのむ

いけみ乳とのむ

後任

いけ

つらうと甲斐又の代とも足る
松風

静のあつ虫きよら山川のそけい
しき御を形言しし付ねむ山歌を
ゆゑひひひひ

松風

はのふ系別髪を埋みまへん
代の危く物すさまじきを足しあのま
あまを歌しし甲斐といふ古人佛出
の古法未だほく自然の昔事と昔の
あまをくし刺髪をほく至化言新く
まをてく矢付の

茅草

とつらあし記をすつたの戸
あまをすまはは果作しきまは

ゆきり

吹りとり車かきゆりせのけ
李のい

あまは名の御をこしりり
福を結しかられ後人のつらき
あまを日をにきくは御と只白梅
白化の初るるはまき眼を過し

白化

橋ハ小あまをまゆり
まのまをまのつらやう
あまをまをまをまを
あまをまをまをまを

朱弦

あまをまをまをまを
あまをまをまをまを

三十八

時を田圃とて言ひ給へりては破れぬ草山
子北幸いし海河とれぬきりきんか
あつ秋あつと矢し喜よし給へりて
をのうとて言ひ給へりて

岸白

志のうとて言ひ給へりて
白付のうとて言ひ給へりて
取つ葉は枝とて言ひ給へりて
庭のうとて言ひ給へりて

子里

白付のうとて言ひ給へりて
取つ葉は枝とて言ひ給へりて
庭のうとて言ひ給へりて
林のうとて言ひ給へりて

庭のうとて言ひ給へりて
取つ葉は枝とて言ひ給へりて
庭のうとて言ひ給へりて
林のうとて言ひ給へりて

子

庭のうとて言ひ給へりて
取つ葉は枝とて言ひ給へりて
庭のうとて言ひ給へりて
林のうとて言ひ給へりて

松風

中れに是より取れして白きかきし付っ見
おのりうし極物多むのゆーひふり
かふりー

コ腐

紫分の 風よ名良きく入
えん民切くさして紫先射ーお白民家
ーと武士の老若ともさし取ーも物
なと尺付く作し大形ハ物流りまの体
も取れーさる白し成ハ中持さく人の聲
片く小蛇入入厚舟も入付くたよの
たぬーさるんたれともさるさるさる
干ハゆーりえ舞踏のこも付くことさ
とやーかに

其角

か、伊とさるのうけたる 狐足
敷うけのさるん何しと尺付くさの
も白化風情をぬふ付く思えぬまに
いひ持くさる心をかー

久野

ゆーさ、月夜のみまらかろうさ
そのねの感法ふ作もさの付く傘の
葉の海さるん無ゆりさるも月さるん
尺ゆるおゆもーらー狐足さるんさる
干付付くさるらー

其角

石の戸 榎鞠すの坊さるすみ了
葉、さるさるさるさるさる風冷く
ゆゆるものさるさるさるさるさる

疾起くゆのちらきんほくさひ 芳重

時をいとま令をうりしみ使を以て

一石をうりし時をさゆいふたしするに

持てしやのちらきんほく起てしやのちら

舟より海にゆき海にゆき 共角

舟より水邊にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき 李石

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

舟より海にゆき海にゆき

待てしやのちらきんほく 翁

待てしやのちらきんほく

待てしやのちらきんほく

待てしやのちらきんほく

待てしやのちらきんほく

待てしやのちらきんほく

待てしやのちらきんほく

待てしやのちらきんほく

待てしやのちらきんほく

まやりの事清原もやりの物休
しき休を心ずけし行の地を
くの中と認め就改りて
るの地とする又字の可の味を
しに解るるは秋の味なり

友よふ 蟾 け物しきの あり

仙化

友よ蟾を改改ししけし物むの休
物清きことさるありては
よくうけらるべき物とす
あふををぬしひ
あふしそりや
蟾の物とすも
あふの休をさる

コ春

あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは

門の息干 夜 陣の 寺

岸白

あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは
あふの休をさるるは

岸重

三十一
三十二

三十一
三十二

さくらさくらに新まつり一母の甲はねとや
うへ安永の心とえ有るこゝろと心金とく
白をさくら

其角

何れゆの散れ海をさくら
おりの橋をよくさくらこゝろと心金とく
むらむらむらの心とえ有るこゝろと心金とく
とまらむらの心とえ有るこゝろと心金とく
能取

文鏡

船の一夢つたりの心とえ有るこゝろと心金とく
たつし階はさくらこゝろと心金とく
さくらさくらさくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくらさくらさくら

よきさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら

摩訶

紅の鮎 花 秋 雪 白
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら
はなさくらさくらさくらさくらさくらさくら

春白

三十三

世もくらし海も秋の萩の萩もくらし
はきもあふや 聖 叶もくらし 夜もあふ
杵風

此の竹根一も又秀逸して物邊の園の
萩の萩もあふのくらし する時分 聖 叶
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
わなもくらし 叶もくらし 叶もくらし
揚水

人阿まのくらし 物もくらし 物もくらし
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
大晦りの夜もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
かみもくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
朱弦

酒もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
洞

金山の糸釣の大空もくらし 叶もくらし 叶もくらし
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし

右巻葉の葉もくらし 葉もくらし 葉もくらし 葉もくらし
葉もくらし 葉もくらし 葉もくらし 葉もくらし

叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし

玉川やあふのくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし

叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし

叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし
叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし 叶もくらし

三十一
四

下りるるせは在かこよは
 南むく葛原の柳の葉きし
 親と桂と折屋のつれこ
 餅化るあらの度多を折合を
 糞子買うし秋のくさり
 唐のまもるまの女人もあつた
 みくき男のつゆふすむ月
 蓮の雨後七里をぬきし
 仔細河内のみは川つ
 多車米つくるる河
 梅はさうりは院くを閉
 二月の蓮葉人もすはる

楊水
 不卜
 久徳
 松風
 高
 朱法
 不卜
 李正
 楊水
 其角
 高
 不卜

姉さの牛は産ふりの氣
 胸のぬれ越の端を蹴る
 ねのひめくくく若の菊さ
 菱の葉をさきつみをてた
 木魚のゆつ出うけ
 団をやし休む釣月
 秋さーあつちつれ
 一射をく矢う矢を付
 くら多のらん女は蜂の
 三度徳芳世のきく
 名 情をまぬぬきま

若童
 高
 松風
 久徳
 李正
 高
 不卜
 子喜
 朱法
 仙化
 李正
 久徳

三冊

一 河うみ習ふありのうつくし
 岸白 芳重
 水波ふ笑折りう驚うく
 岸白
 梅まきと昔ふめあひあう
 口水
 村角う石のくも火吹けぬ
 口水
 地とる水の沖とま川う
 不卜
 伊勢ものる内子おりの所とき
 李下
 梅うきと橋つく秋
 楊水
 作長のやとされせやみゆ
 文鏡
 屋すくゆる石ふの吹
 子喜
 紅子牡丹十里おまをふ
 口水
 ちうしむ昔うあるゆき
 口水
 岩根論ゆもふ地龍をあひす
 水角

久くや三井のころは法法も
 化化
 通ぬあふあや奴千返家
 芳重
 管領をさるすも月八は
 楊水
 足成の庭山うううの海
 水角
 子あ唱う観るの海
 水角
 舟ゆくつ海みあうう水川
 水角
 をあううううの松の志
 口水
 宿む一ふの七折あ契う
 不卜
 まらうくうううまう久
 岸白

古本
 久のうやうううううう
 久のうやうううううう

三冊

旅あゝ友をささぐひこす春 扇
かたハミヤう極の葎掃墨 其角
ゆしこひきる一舞の 風雪
月くれく燈火赤ふ海の上
昨の塵より吹みきのおと
牛嶋より給持をく羽折るは
宿位阿くく真女百々をく
提灯千大燭燭のさくさく
出あよりいす字の材木
あゝあゝハ舞ふ花の背戸
はくわくわく後守物美し
仇人のあやういさし氏を控

ゆき付たる果その空 本
峰へ送る八重山もこの犬の鳴 本
軍のか滅くとき長おひ 本
七はよに心くさくぬ月もあも 本
浮生くうけく海東の帳合 扇
高僧の湯衣清くはくく 扇
小娘はゆく葎礼の中 重
丁堂もさくさくく木杖袋 重
あゝあゝあゝあゝあゝの地蔵 本
あゝあゝあゝあゝあゝの対馬 本
はらゝゝあゝあゝあゝの夕ヶけ 本
雲かゝるお食すめのお話え 本

毛體も——きと画のと——やう
 くらゆる底のふく十景 家
 りそむ時そ醉さきの月
 きうくくはつこし浮ぬのふけきま
 草にくすしき筋の程はむ
 つ川とこもふ部の護るの片は
 四の筋もふそふく家の子
 鼻つすむ屋ふくきの生 看
 石ころすまけぬころけりきハ
 縄きれく架本ふく花もくふ
 水もふ葉のこけく長 葉き

角 霜 末 角 空 末 霜 空 角 霜

三月廿日

花吹雪七口朝足く物もこころ
 懐く柱はわくく 細 橋
 足踏木を妻きく水代——
 米一升をさくく 昇の戸
 名有る 隙ハの箱くこ子 枕
 枝尺くく——き 柳の葉を 菊
 暮名子くく虫はかろ暮く
 肉おれは向きりうあうう
 既子立付るの使の息く
 一衣の暮り 踏うけく
 松のけり虫足んくく 雲ハ 峰

角 霜 末 角 空 末 霜 空 角 霜

善師の海に玉を懸く人 篇

郭の舟に秋の孤をうつし 篇

風 飡 喉 早 乾 篇

すくはつる黍の葉はゆく秋立て 篇

肉を炊くともう庵の夕月 篇

霧 離 顔 孰 眞 篇

震 浦 月 潜 音 篇

ぬらんまをそをねる仙の歌 篇

山 伏 山 平 地 篇

門 番 門 小 天 篇

鷓 鷯 窺 水 鉢 篇

まのこりこりしたのちを返け 篇

たふしふし初瀬の音を花をえり 篇

臨 谷 伴 蛙 仙 篇

城 塔 の 聖 を う へ る 海 の 音 篇

海 音 う へ る 芦 の 穂 の 上 篇

雲 の 舟 け 鐘 を 隔 る 松 を み る 篇

宵 子 へ 入 る 夕 暮 の 石 系 の つ け 篇

入 月 子 舟 船 の 武 老 の 心 篇

葉 の 笑 へ ば 雙 葉 を 河 中 の 舟 篇

山 子 の 登 へ ば 孤 の 舟 へ の 庵 篇

山 子 の 登 へ ば 孤 の 舟 へ の 庵 篇

山 子 の 登 へ ば 孤 の 舟 へ の 庵 篇

四十一

花とらふやと酒造りし
まのこころにまはれし
志らきめし葉の垣を
縮法を標の楳子筋
みよれし髪も直らん
細くも小形大のつみ
何と焚火とこれ
楳の力ひらつのも
岩はふさふさし
木念の木の礎や
四十雀了る風も

岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩

手とやあやのれハ星月
峯 紅梅をたむ
喜もを原をのち
山と尺とるま
ひくもをとおそ
故き子ちす秋
有のすすくも
帆を八合子
掉 郎の

其角 今我 岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩 岩

古池や埴島こむあのみ

篇

四
十
三

四
十
三

はたさうし心かうらんいし時

濁子

養蠶の事ありてりるる月

扇

貝ひらひしゆり改を行く

其角

酔えハ人々肩をくくつて

扇

くしの知えれしておもいら祖文の事

子

松松苗救蟬の啼き

角

池の穂こきりさめぬ垣越

子

みちと入帆のゆるる屋根枝

子

奇の中を馬ののりたる葉の枝

子

妹らかいられ名猫やきき

子

比念くふ袋のきれれさうし

子

鳥を占きく室の朝風

子

はのふおまよはしと物ア

子

二枚とすりの袋をさうし

子

一巻の巻末をさうし

子

苗代もゆつ高きなり

子

鶴の巢のいづり可也とさうし

子

仙豆下るるまゆり月

子

同

子

冬京中人さうしぬ市の始

子

曙をさうし入り山の雪

子

寺の夏信抄ひぬく法

子

火をたく舟の星さうし

子

仙化

子

終るこく松舟もくろむ秋の月
かきしにみんすき一むく
たか持る幸の如けしをみり
舟の翠層を流し心珠
かみたる友の波を打た
うけしと心すいらに指さ
橋より枕をさくし
ゆき合の如くしらす
か長川の如くれを輪の如く
み林をさくしらす
舟の如く方す枝つとく
舟を終るみす月を照る

松風 二齋 子 化 角 風 子 角 子 角 子 角

花の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく
舟の如くを七八の長とく

李二 風 角 子 角 子 角 子 角 子 角

月入る電はるる藤すこく
下りの勢を荷ふ焼 朱
塚のふ母堂のくお秋の他
邦を軍をくくゆくそ
花のたぐきくつる強くむく
すく甜をゆくす目白まを

子角富化

十月十一日銀子會

故人の心を歩むお初対面
まご山をちを宿くく
貯貯の心はくきおたのしき
糧を分るる山くけの朝

白之 其角 松風

かけゆくき生のふけゆみく
新しき基力月を舞くや
中の秋画工一巻得く
鮎くくく送く海に
井垣や次中くひくき情の心
歌くくく杖束く居 松
風飲くよ乙女達のあくひ居て
和角のきを振る能波招
鯛約袖つくさくく子殿川
等一画年跡く楊 杭
是くくぬ里く堪をかくく
月くく匠ん伯瀬く器人

文鏡 仙化 魚災 親水 全峰 貞雪 執筆 角 之 角 風 鱈

葛の葉をむすひも初る川に
まをぬきしをくまの俣侶
逢井のまをくまの俣を
仲こくぬきしをくまの俣
花のぬきしをくまの俣
まをくまの俣をくまの俣
明のぬきしをくまの俣
萱のぬきしをくまの俣
光のぬきしをくまの俣
君のぬきしをくまの俣
ぬきしをくまの俣をくまの俣
いのらまをくまの俣

化 峰 篇 之 空 吹 角 篇 之 化 水 吹 空

起出くまをくまの俣
まをぬきしをくまの俣
小のぬきしをくまの俣
子のぬきしをくまの俣
常のぬきしをくまの俣
まのぬきしをくまの俣
懐のぬきしをくまの俣
信のぬきしをくまの俣
尺のぬきしをくまの俣
場のぬきしをくまの俣

空 水 峰 之 篇 吹 化 角 峰 之 空

路家や家居虫の友千交りてん
花千如く海苔すくまてん
管海ふくくくおれ本芽のみ
あつきしれりうまの山

水篇 火之

香気あふくく旅人の白をみく

如行

旅人と香尺もやきおまの香
さつつきききき 細いさききき
まの目の跡の本城を其を先
高千あききき 庭の砂系
小法師千弱いお却る改てん
柱の古枝を海千おそく

桐葉篇 竹篇 紫篇

香気あふくく旅人の白をみく
物くつく香尺もやきおまの香
まの目の跡の本城を其を先
高千あききき 庭の砂系
小法師千弱いお却る改てん
柱の古枝を海千おそく

竹篇 紫篇 竹篇 紫篇 竹篇 紫篇

芭蕉翁不使了して止め

写海寺の白く業言再り飛鳥井雅章卿の

侍後子のかつて侍りしを和す

系たしくハまこと小中ややのや

子もまはしくははの月

小給ふたしははの月

酒家さむしははの月

浮於しははの月

僕ハおらたはる牛いとこ

あはれ之反哺の物事つり

つりお命の飯さす

舟取もあけのさうた

障いくまふあ

手安わのなはな

ふとこをそと

梨のりる無の油はな

あやう瘡かこ秋ハ霜

物産のあはれ

桐枝未撲のら

少油

こら

夏の手をぬる

父の軍を起す

松のけりか

翁

業言

知足

如風

安信

自咲

重辰

咲信

翁

足

翁

風

作

足

辰

作

足

翁

咲

翅とあふふ竹一はうの
新ふる急な勢をこゆるき
三度折しつる勅のかくしけ
山中のちり割る木を菊の
煙あしつる暮ららうく
流津激すおとろふはの勢あし
歌くくしつる勢あし
辰破る月ハ世の勢あし
光うお姥のうらもあし
子うはつし楳の枝の志しける
陣の仮座す基をゆるしける
山さしは枝をゆるしける

竹 風 足 菊 辰 竹 風

音をばりけり多し対もあしけ
花臺又を築くむとらら
湯煙うらうく 作 垣 の 梅

竹 華 竹

に免つけりおとろふはの勢あし
凍あらしんか捨てぬ女 暮
松風を吹く白向のまらあし
朝白きみおしつるおし
あしはく舟押すはの秋のそけ
あしはく山の端の月一
あしはくや鳥籠の豆あし

越人 聴 野水 菊子 危洞 昌 洞

五
十一

五
十一

山ひやむし〜の〜神の 駒
志しうけ〜厚敷は〜ふりたぐ
指さうらひ〜う〜際さうらひ〜う
何さうも〜あ〜う〜う〜花の陰
藪の中〜も〜枝 山 ぶき

愛水人回家

甲崎の園を尺〜と〜や〜
船 酒〜つ〜海士の 埋 火
築山のあ〜れ〜う梅を植〜け〜
遊〜さ〜子猫のま〜さ〜う〜
〜そのお〜ね〜を〜お〜山内〜の〜

業言 知是 自嘆 安住

一里の〜母〜う〜川上〜
利〜さ〜〜め〜し〜門〜う〜く〜山〜
赤〜さ〜わ〜〜さ〜け〜 ぬ〜さ〜お〜老〜外
牛〜め〜れ〜ら〜み〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜
鞠向のま〜ゆ〜め〜あ〜う〜系〜い〜ひ〜き
月を〜け〜〜う〜る〜螺 乃 酒
う〜想〜か〜ふ〜と〜と〜う〜け〜て〜秋〜の〜風
後〜の〜神〜さ〜う〜る〜う〜活〜の〜橋〜古
危〜造〜了〜あ〜り〜苦〜の〜あ〜ら〜花〜と〜
海木〜多〜く〜く〜枝〜の〜古〜枝
吹〜さ〜る〜屋〜飯〜の〜時〜と〜と〜れ〜う〜

如風 重辰 是 何 吹 翁 何 何 是 何 辰

山崎のふりかへしはけし
手掬えは酒のうらさう水
角阿の角の化粧いさう家
才川才のふりかへしはけし
新のふりかへしはけし
花のふりかへしはけし
式のふりかへしはけし
海川末のふりかへしはけし
椋子のふりかへしはけし
室のふりかへしはけし
細のふりかへしはけし

是咲菊風是信此之菊此是

十きまらあひく荆袖い
新のふりかへしはけし
海のふりかへしはけし
氏人の在園のふりかへしはけし
智いのふりかへしはけし
田のふりかへしはけし
かしのふりかへしはけし

執筆 信風重咲辰菊

十有廿四日
佛のふりかへしはけし
鹿のふりかへしはけし
石のふりかへしはけし

桐葉

五
五

時（ハ）如かき暮る風止ま
糸鳩陽（る）山のうけふ
種（ら）提（る）海（を）言（の）い（る）家
節（一）（一）（一）（一）（一）（一）
肌（を）く（ふ）く（ぬ）肌（を）く（ふ）肌
（の）（を）（整）（め）（く）（る）き（強）（力）
的（わ）（ら）（強）（め）（る）む（ね）（は）（さ）（さ）（さ）
破（れ）（し）（玉）（竹）（境）（も）（の）（境）
古（柳）（を）（ひ）（く）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
物（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
松（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
雪（も）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

能（中）（の）（礎）（了）（ゆ）（ゆ）（る）
温（泉）（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
以（海）（の）（女）（の）（さ）（さ）（さ）（さ）
洋（に）（影）（を）（映）（す）（は）（ら）（る）
新（春）（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
中（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
糸（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
幼（雲）（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
物（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
能（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）
海（の）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）（さ）

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

五
五

折ゆらむ松も似るを
何れかの聲は虎月
秋山の所統と告るを
そ一節をかりか
優優寒の所廟つ
昔人起す夜
意果すぬれ葉の
石の下の葉を
意の秋をけり

葉、葉、葉、葉、葉、葉

珠の如く葉の頭か
佳士の葉とよ
所在の志は
秋を彼
矣中此
万一
言の
音の
木
と
志
放

如風、葉、葉、葉、葉、葉、葉

五
十
七

五
十
七

雲がけの籠 移るみの春をこぼし
蝶けし 顔の軒工も 月
秋や昔三子もけしおとく和
以りし ちけりつらけのちか
ちけりつら 義見くゆするもつは
瘦しつら 女まきつれつら
米りしに字の戸もつおらうみ
山のこころいをはくむろく芭
わのこころいをうらむらり松
うきををせむらうきあうのち
くすのみと水の梅のそひみ
おとくをりあうをを楚のまのこころ

信 展 足 吹 風 信 翁 展 足 信

いろきりつら 有敷の信女衣まき
きりつら 似つら 思つら しみりけ
おのこころい時代のけいめいのおひ山
きりつら 削る伊勢は信女
貝のかく色つら 力の氣は遠く
おのこころい やりあふ花の信女
おのこころい 移る植る菊の
母のいのちをちかひらうら 雲
年つら ちかひらうら 雲
おのこころい 花のまきつら 雲
おのこころい 雨の移る蓬草
おのこころい 花のまきつら 雲

信 展 足 吹 展 翁 信 展 足 信

笠根より人をゆりしきもの
舟に焚火を入るを茶の葉
区ふ丁布酒干き茶尺く
柄杓につく藤の木のゆ
めりやしゆりぬ力の海探極
勤くしを揚る登の杖
帷子に給羽折も秋めよ
食子臨くまを回令まら
神主も歩ハ大うまはけ
堀んすく藪のいひ
とわしと藤の法子朝陽

扇
聽廣
如行
野水
越人
若子
執筆
雲
子

待やうり 念佛
忍心入戸をゆりしきもの
くまを走つる力の傘
長き杖をばさるまみの音
人子抱れくぬをゆりぬ
若の賀干りし物衣を被り
今まし梅を裁る幕串
是より人へのおもひ
に物さへいそみゆ

人
水
竹
人
水
雪
扇
人
若
人

五十一
一
心

五十一
一
心

春もる雨の程 通り 婦
己海つゝいふれ紫雲の暮しと
手鬼足ししみの出た 父
布袋破行次舟の秋の風
和島の月
ひよとよしとよかまを忘る
妻戸はききと遊るゆりぬ
ほして志わくの端の果ては
ゆりゆり姿あり 改まるとまに
舟の中は泉登き下り了嬌いれ
俄と舟を空をまらひ轉けて
旅衣尾張のふれ千花を

水竹 篇 人竹 篇 水竹 篇 人竹 篇

富士画うゝ又うゝ妙の
旅より重入る花相うゝ
新しうゝ一柳ありうゝ

水竹 人竹

三月の二井亭無行

篇

旅の舟よりいかに沙をうゝ内訳
春さくちはくつとる花を
まわしとるをゆかり行焚く
残海を尺とて師音のし
琴おのむらりの上を傳ひり
浮きゆれい清くしと火
起るさくみしと自由をうゝ

一井 人 昌 碧 竹 東 睦

みるゝ一 登良の汗ぬらひたつ
 ねもろく又もけりなきのきさ
 乳とのむるはあつたし
 麻布を熨ひしに織りぬる
 菅さとりこたへおこし
 又まの矢すゆゆの雷のき
 るもあつたぬ山陰のき
 小男麻の袴矢を袖に付き
 花あつたはとあつたあつた
 本うらに付けりまの二三
 とくけりつくとおはさるうし

菊 人 竹 号 碧 号 人 菊 碧

錢別

対面（に）登りて豆んまの院
 大徳の葉を 徳をつくる人
 松尾のそりて 物をもとの
 初音ハとつきほの山は月
 膝ひの三つかり秋の
 葛の縄面をゆされ一
 膝ももつて 家のまをさ
 餅ニうらひ ちりちり
 うらまはちりちりちり
 鐘ぬらつて 踏すま

岸白
 菊 漢石
 口齋 甚角
 卜千 嵐雪
 白 菊
 石

同

きりうのひらぎをりそまの松の澄
一羽わううしふき一も花
枯らふといふし松のみとく
回中のそれ通るそゆく
月わそくおのちかへて敷
秋風上り門の半一松
春の系瑞を通り松の春
雨りハスきし馬のきを松
松林女ゆししのまはけえく
雲情うけをかへて

松江

菊

曾良

依

泥片

水津

風泉

夕菊

苔翠

執筆

ての秋麻高り所のうそま
きうぬらむしゆの内とんも
危を付

風瀑

菊

一品

琴花

虚洞

海川ハすみ色吹ゆも松をうれ
まおそへけそ松のゆ
初雷のけしめれ市の白和えく
物とふ月のおねうみそ
牛車香おらまあれそ安ん

菊

女角

おのふかも母ふふ高う冷しき
香きし松のみしお花の香

夢見の頁を一通り弄す

箱

写海海治出羽吉氏書宛より

箱

舟もたたく回舟の大橋
船つぎの岸の三股花枯る

知是
自誤

宇思危知是の海く菊をのたまふ

箱

いく前紫をこれけと柳と流山す
旅よのちかきをたすのちのち
と物に月夜を小器物に歌當り
里のおとくにに水菊折き

知是
歌水

市人子いさそ花をん雪の雪

箱

酒の戸たたく歌の枯梅
物に月夜を小器物に歌當り

杜園
花月

雲をよめ花をん花一室令

如行

秋の文をまし竹河の歌
舟の文を擲きしとて後海
舟の文を擲きしとて後海
海の文を擲きしとて後海
海の文を擲きしとて後海
海の文を擲きしとて後海

夕道
箱
野水
箱
瓶

三十一

三十一

麦飯をうぶや陰家やをよみむ
みくをさうりに山景笑ひ
壺の底を壺のふちの底とす
野人

翁

いさくらハもえん手結小雲かき
硯のふちをわらふお
起
同様の情しぬきもあし
三十餘年よむれ食ふ
阿比山のつらハ方の湯をゆく
かや釣せはやくしり
故江

翁

美のむさしんも美の枕のうら
おししむれぬ子ねのた
起例

翁

からふるは杖京坂を音了れ
角のこころめあまのゆもの
去来

翁

真子子辰辰年
何の本れをそしりしりみ厚い
おしりおしりもふくみ
まほふ葉の指をさくら
又云

益光

三十一
三十一

三十一
三十一

二葉のすくし行舟きちり
馬のついでときわ引つてみ
初ま先ハ長き枝のゆき火
泊折る流のかよふき
門はとあつる回の中は古
山はまゝ清きすれき油の汗
かよふきとたのむ
女のみ古おゆ館の破す
樓をり附つては流首
のわらに海をくまは物心
陣の仮し信のき
白きすのあはれを

平庵 勝延 清里 光 翁 庭 野人 完 里

けりめえたる玉れ物
さる月を結、操織とよ
さるきみつて指のくま
二 神はくはれ末の流まの
色をすつてはきぬの
急降と池のやめを
よ終る追子起し
たんと吸かきよの
終りのものさ
ゆきつる樂の一を
約の王子は海は
あつる華表、あつる秋の

完 翁 里 院 言 色 人 光 翁 庭 野人 完 里

おあつ 風を 限杏 吹らつ
黄うけと 秋毎の ぬを 足厚し
心とすさむ 家か 国々 きうえ
親ら〜 葉の 秋水と ちけきつ
先初 瓜を 来り 代あす
は村を 時々 びや〜
ゆ〜 心 櫻子 舟は ち〜
もの ぬの 子 強を 引 枝め
たん さく 枝子 秋垣 の 雲

人 色 玄 正 永 翁 光 危 人 色

浅きぬのぬ〜もあらん雨の花

翁

ゆ〜 ちの 汲あ ぬあ ぬあ
酒〜 中 舟さ 樟の 枝 花
板 屋〜 舟の 舟 山
夕〜 舟の 舟 舟 舟
秋 空〜 来一 舟 舟 舟
腰 舟〜 舟の 舟 舟 舟
吹 舟〜 舟の 舟 舟 舟
夕〜 舟の 舟 舟 舟
舟〜 舟の 舟 舟 舟
舟の 舟〜 舟の 舟 舟 舟

乙 孝 一 有 杜 園 應 宇 葛 森 翁 小 素 翁 字 素

...

...

あふりてけしつる林のいふ
いふつれは光りあはれハ筆投て
中中のより九片神をもく
其のきり聖の風終をもとひつ
幽業集の以末初めりのり居て引て
以ハ平く砂子又字を以て其の備
の多きりかゝるたをを以て
乞食とてしとる楯の本の本
聖一とて虎あつとの力も尺つ
同衆のけしきもまゝ竹子他
ハツ子あつたれ魚信けし

考 有 翁 翁 翁 翁

あふりてけしつる林のいふ
いふつれは光りあはれハ筆投て
中中のより九片神をもく
其のきり聖の風終をもとひつ
幽業集の以末初めりのり居て引て
以ハ平く砂子又字を以て其の備
の多きりかゝるたをを以て
乞食とてしとる楯の本の本
聖一とて虎あつとの力も尺つ
同衆のけしきもまゝ竹子他
ハツ子あつたれ魚信けし

如行

叩端 閑水 翁 桐葉 東藤 江山 柱楫 執筆 行 端

かまの橋のかけつらう一尺
巻終ると中ねや夢の儘
かくきは又の袖や柳の影
際りの東ハなやうなと云
一里まうしふか青林の葉
あやもあさきしなくと云
かまの橋のかけつらう一尺
暖れやうはやくと云
清義すまみと云
とさみしと云
非人と云
従らぬと云

水 菖 紫 庭 行 端 楫 止 庭 紫 菖 水

五寸と書く一寸の
字梅枝の影の
やうな
又
何
古
十二
不
智
お
山

行 山 菖 紫 水 端 楫 止 庭 紫 菖 水

三十一

三十一

邪^レア^一ト^レカ^レク^レハ^レカ^レク

楫

菫子也余^レ昔^レの^レ心^レの^レ所^レ
麦^レ積^レみ^レか^レう^レう^レう^レの^レ末^レ
ニ^レ一^レう^レ差^レす^レ鳥^レ久^レに^レ了^レ
う^レさ^レう^レ袖^レも^レ折^レる^レも^レ死^レ
位^レ多^レれ^レて^レ有^レお^レし^レ海^レの^レ浦^レ傳^レひ
それ^レは^レけ^レう^レの^レ秋^レの^レ信^レの^レ音^レ
於^レの^レ心^レの^レ葉^レも^レ麻^レの^レ耳^レさ^レ記^レ
念^レ力^レ若^レも^レと^レら^レふ^レ志^レと^レ可^レ
その^レま^レの^レ松^レ子^レ一^レ喝^レ志^レめ^レ一^レ直

菫 知 相 叩 業 自 如 重
子 足 葉 端 言 喚 風 辰

長^レ老^レの^レ妻^レ子^レの^レ歩^レを^レ扱^レく^レも
衣^レ袴^レも^レ衣^レ子^レの^レ部^レの^レく^レも^レ衣^レ
岸^レ子^レか^レさ^レふ^レ八^レ百^レの^レ終^レ
森^レ遠^レ子^レ柳^レ籠^レの^レく^レの^レ幽^レある^レ
子^レも^レわ^レも^レ親^レの^レ月^レさ^レう^レの^レく^レ
子^レ花^レの^レ秋^レす^レ多^レく^レ多^レく^レ梅^レの^レく^レ
猫^レの^レハ^レ猫^レを^レ方^レを^レ了^レて^レく^レ
多^レく^レ部^レの^レ子^レ首^レも^レ女^レ花^レを^レけ^レて^レ
姑^レめ^レす^レら^レも^レ妻^レも^レ一^レ月^レも^レ
二
て^レも^レ子^レの^レ短^レ冊^レつ^レけ^レる^レも^レ多^レく^レや^レ
龜^レさ^レう^レの^レき^レは^レ世^レ相^レふ^レさ^レあ^レみ
天^レ守^レさ^レく^レ物^レ子^レ龜^レて^レ中^レ子^レの^レく

菫 足 紫 端 足 原 是 風 葉 其 端 翁 信

玉の如く此の字 尚ほ 昔
葉子くまの木はこころの住ころ
長玉の外面を名 初く心
是 嘆 風

同六月十九日

芦文

蓮池の井の層のむきーまろく
名林もーろくまゆるかの子
きこみやろく火もすき待る
解のつろくー月の大きさ
荷さ真すそつけ人の通るは
扇そ小家の屋ハさ心ーそ
去路よく烟ハさるーそ

越人 性然 吹玉 若詩

櫻ー山 岫の風のふれさ
古まお瓦もろく新河舟ー
萩ーらまの澄人の雲
流ーろく舟のまはさよ
次ろくろく舟のまはさよ
子ゆのろく舟のまはさよ
蓮生の垣根の操もろくけし
蓮ぬけの紐父のまはさよ
足流ろく末のろく舟のまはさよ
つろけの舟のまはさよ
秋の風 檣 帆 つろく舟のまはさよ

蓮生 己百 梅樹 去路 臨步 捨宗 用足 東巡 扇 人 文 号

はー軍あーるわーる及 櫻
去るるに 捨るは干のちせ貝
風心おまふあうのうー
ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー
御階子ゆーゆーゆーゆーゆー
本松より花ちるあいの 翁 被
懐御をもーつーお玉ゆーゆーゆー

出 人 翁 枝 骨 餅

七月十三日 写海御堂

細秋や海もま喜田の一みとま
のーゆーゆーゆーゆーゆーゆー
行府 芳いゆーゆーゆーゆーゆー

翁 重辰 知足

瘦くる 蕨は竹まーまーまー
塔のかーゆーゆーゆーゆーゆー
望ふーゆーゆーゆーゆーゆー
白ゆのちーつーみゆーゆーゆー
白ゆゆーゆーゆーゆーゆーゆー
お氣さーゆーゆーゆーゆーゆー
おゆーゆーゆーゆーゆーゆー
長巻 強ーゆーゆーゆーゆーゆー
物産庫の一寺も 恥る 思 髪
折字も 瓦の鬼は 氣さーゆー
能 鶴 鬼さーゆーゆーゆーゆー
深 瀬 川 向ーゆーゆーゆーゆー

如風 安行 自以 風 是 風 吹 翁 行 辰 翁 風

七
月
十
三
日

七
月
十
三
日

朽きしにこよ由を破り
花の香を籠り尺さしよ由山
よおししるや寺のまき風
あふの橋ふつとハ雲くくく
白雲きく岸くくく市
其ふの糸をわたくく物布衣
くか一七ヨ戸帳くくふく
かくくく百その糸ゆきく路
あふゆのきん尺ハの女
湯ゆくくおれくく物敷を敷くし
おくくくく今の外くく地
あふくくの結あくくくくく

作 是 牛 歩 作 是 作 是 作 是 作 是 作 是 作 是

魚は心おれ岸くくく。月
あふの糸おれ糸の念くく果
次中くくくくくくく風
物の子は親あふくくくく
物も旭も葉の戸はハ
石ふみくくくくくくく
松葉くくくくくくく
かんくくくくくくく
故地をくくくくくく

作 是 作 是 作 是 作 是 作 是 作 是 作 是

お竹葉折無形
粟稗くくくくくくく

篇

藪の中よりうらやめつた
秋の雨あけぬをうらやめ
月あやめぬをうらやめ
ひらきと人の心をひらき
移らぬと人の心をひらき
本葉らる枝の葉も移らぬ
はらけぬと人の心をひらき
道はるくはらけぬと人の心をひらき
森より移らぬと人の心をひらき
あけぬと人の心をひらき
死にゆくはらけぬと人の心をひらき
る花もゆくはらけぬと人の心をひらき

長虹
若号
一井
越人
胡及
流彈
崩
垣
号
号
井
人
及

葉をうらやめつた
火よりうらやめつた
走らぬと人の心をひらき
高きと人の心をひらき
二
木よりうらやめつた
色をうらやめつた
切花をうらやめつた
さるくの香をうらやめつた
人一代の香をうらやめつた
折一世代の香をうらやめつた

浮
翁
井
号
号
垣
号
号
井
人
及
崩
江

きこみくちなれに鳥も鳴くは
かよは子狼きし指す又の
戸をゆめぬる望の秋の亭
早笑の物をあまにさし
嫁とぬ娘の肩うさげ
志のひきすすりきあす垣のたぐ
端きやききつ松のともし火
ゆかきく杖をさすも。後まて
何をもさしゆくはさしきしや
あまのよも現のききり物さ娘
すゆれさしあすきのみさ

七十五

人及号翁浮人及翁浮人

元禄元 九月廿元

いらし(の)菊とひらの自由の家
秋のゆきをさす秋の秋
去丸うさぎの舟の影えし
是ゆらやききり人のともえり
あまのよも現のききり物さ娘
揚子ゆめぬる望の秋の亭
早笑の物をあまにさし
嫁とぬ娘の肩うさげ
志のひきすすりきあす垣のたぐ
端きやききつ松のともし火
ゆかきく杖をさすも。後まて
何をもさしゆくはさしきしや
あまのよも現のききり物さ娘
すゆれさしあすきのみさ

叩端

桐葉 翁 事 工 山 水 撰 紫 翁 友

七十五

おとよし 侍 崇 垣 の 権
此書と名をいふ竹の家は
中川に伝名をいふは習ひ
南よりあつたふり
よもきをのそくふの
折るく 楚ゆかけのさひく
女房のく 楚ゆかけのさひく
数年と物のく 楚ゆかけのさひく
瘡 楚ゆかけのさひく
さく牛ぬ 楚ゆかけのさひく
さく牛ぬ 楚ゆかけのさひく
秋風や子をたぬのさひく

菅翠
友五
若菊
此片
依
五人
玉
菊
翠
菊
人

管の 楚ゆかけのさひく
り 楚ゆかけのさひく
仲子 楚ゆかけのさひく
唐人の 楚ゆかけのさひく
破る 楚ゆかけのさひく

菊
菊
菊
菊
菊

流川の歌

酒きいふふ 楚ゆかけのさひく
着るふりた 楚ゆかけのさひく
伊をさ 楚ゆかけのさひく
蘇子の 楚ゆかけのさひく

人
人
人
人

流川の歌

風子 吹流る 帰りの 市人
 何より 長安ハ くれ名利の 終
 際のおち ちやうの ちやうの 終
 いそいそ といふ 色のおち ちやうの
 ひらひら といふ 寺の 終
 けりやう ちやうの 終
 足跡さの せぬ ちやうの 終
 きぬく ちやうの 終
 風ひらひら ちやうの 終
 まつた ちやうの 終
 物強く ちやうの 終
 月と ちやうの 終

破れ戸の 新ち 終
 尺 ちやうの 終
 匣さく ちやうの 終
 物さの ちやうの 終
 人さく ちやうの 終
 初遊子 ちやうの 終
 好く ちやうの 終
 垣植の ちやうの 終
 ちやうの ちやうの 終
 ちやうの ちやうの 終
 ちやうの ちやうの 終
 ちやうの ちやうの 終

砧と暮く露より居候
秋の月と菊をぬらふは長引く
さかしくあつて又字アリ未
いのちくく瓦底の木も夜
花もすくすくの瘦しめはあや
花の陰消義かゝるうらさく
田よりさかへて解や

人 人 人 人 人 人

大通庵を急追善

今かからんや枯木の枝の長
子守をすし守す一垣の地
義徳のみゆきまふ止

善 善 善 善 善

風の悲きうにあつて物の言
内洞のくほのあつては月
ゆきをうけつきのあつて
包めともやうし冷らわらひく
そをとおもふぬなまるとく
君はあつて物の言をわらう
あつてうらつて念佛あつて
いのちをいれあつてあつて
隙を起すあつてあつてあつて
義の月風あつてあつてあつて
地より稲妻あつてあつてあつて
拾うれぬ金の言あつてあつて

友と 善と 海通 曾良 五 聖 通 善 良 善 善

善

花をばとらん梅は早咲
お酒も外酒の食干す
お酒も外酒の食干す
精ひく船の馬場は
火を焚き息をこし
てしし操り虫のあつ
おのりちひまき
生は付尺ゆき人の
親りしつりつり
去のさわき昇も
蔓のぬきしお
不二備おひ

宗波 友五 菊 良水 通波 五 菊

母の佛 縁後子 砂川
月棚 白蛇の桶を
濁りをすすめ
破れ扇の骨を
お新をき
娘と子娘の
おや
おのりちひまき
おのりちひまき
おのりちひまき

水 五 菊 通波 五 菊 良水

花より由とてはあやうき
秋山より山崎のわが
くまのくまのくまのくまの
あまのくまのくまのくまの
心をけりて入るかられ
文字のくまのくまのくまの
まゝのくまのくまのくまの
侍もはなれ侍もはなれ
百くまのくまのくまのくまの
花より舞に男より舞に
笑より笑より一強治のくまの

菊 五 通 良 通 水 菊

三十三

花より由とてはあやうき
秋山より山崎のわが
くまのくまのくまのくまの
あまのくまのくまのくまの
心をけりて入るかられ
文字のくまのくまのくまの
まゝのくまのくまのくまの
侍もはなれ侍もはなれ
百くまのくまのくまのくまの
花より舞に男より舞に
笑より笑より一強治のくまの

花水
菊 五 通 良 通 水 菊
通 縁 雨 嵐 宗 曾 友 菊
通 縁 雨 嵐 宗 曾 友 菊

三十三

麻の羽衣平流む山吹 菊

夕ぬめ二尺の七五を季の音
藤竹うらむ棋掃の河
鶴うら懐ぬか口角をきて
村の地取うらおこす秋歌
秋あ湯の湯ぬ峰の月
紫もよき松女方と核よふ
おれつとぬ常盤の里の菊
まふくひくくお根の流ゆみ
之味縁を暖くうらあつくと

菊
感水
曾良
嵐竹
常波
詠通
友五
泥芹
若菊

はくくくく梅のぬむく
茶ひくらの情を思ふ流七と兼
橋あゆめくく梅うら一尾
お力の根うらうら作の面
号とや侍の袍縁鬼よむあ
侍のあをくくくや秋の蝶
及ぬららうらも音ハた
半終のそあ知ふ花の坂
情あけくくくくくく
姓あけくくくくくく
祝をぬくくくくくく
夏も花いふあうらおはす

菊
通良
水波
菊通
五通
竹菊
波菊

あふさかりにあらはらふ
男多に姑すこれをもかき
後天梅子鼻跡をいす
老ゆ成、計のしすの背ける
子あうく結はさしうきさ
唯のあふさかり二いふを直に
ゆきみす、さく、授さるるし
甲斐信濃身をゆきさ湯海
京さう、まれ、あ、物、能

五波良 通 菊
雅良

あふさかりにあらはらふ

菊

あふさかりにあらはらふ

菊

あふさかりにあらはらふ

梅丸

あふさかりにあらはらふ

梅丸

あふさかりにあらはらふ

梅丸

あふさかりにあらはらふ

梅丸

あふさかりにあらはらふ

風を捲く月あり月あり
秋垣の家あり月あり
和泉やうき子桐は
篇 足 信

ひさしと松をけし
菖蒲うき子桐あり

木うきし月あり月あり
よき松はくきよ見
船のあり里の垣松をけし
篇 松 舟

春の折り月あり月あり
月あり月あり人の影あり
みふと月あり舟あり
越人 月堂 舟泉

